

# 幕末石見天領の地域別人口変動

## Regional Aspects of Population Change in Iwami Shogunate Territory

廣 嶋 清 志

HIROSIMA Kiyosi

### 1. はじめに

石見天領（石見国銀山領）は銀山と関連する産業と行政の核である銀山町と大森町を中心とした地域で<sup>註1)</sup>、人口についてもこれらを中心として都市的な様相が周辺に広がっていたものと思われる。こうした地域的な様相を知ることができるのが1時点の地域的な広がりを持った人口の資料であり、熊谷家文書に含まれる宗門改帳がこのような特質を持っている。前稿（廣嶋, 2002）では、この宗門改帳の1時点分（文久3, 1863年, 一部, 文久4年）を電子化したファイル（RYOMAファイル, 後述）を用いて人口を分析した。その結果, 3地域（沿岸, 中間, 山間）別に平均世帯規模, 世帯内の平均直系卑属数, 同居児法による合計出生率, などの地域差（沿岸>山間>中間）を確認し, 地域別の人口増加率がこの大きさの順になるものと予想した。しかし, 死亡率と移動率を推定することができず, 確定できなかった。このような世帯構成や人口動態の地域差の原因を考えるために, まず, 動態事象を直接記録する資料によってより詳細に把握する必要がある。

熊谷家文書の宗門改帳は文久3（1863）年（一部文久4年）のものであるが, 部分的に動態事象が記載されているものがあり, 今回, 分析のための資料として用いることにした。宗門改帳の表紙, 各個人の宗門の記載方法や, 末尾のまとめ書きまで, 各村各宗門ごとに記載形式は基本的に同じであるが, 多くの相違点もある。これに触れながら分析方法を説明する。

さらに、前回の分析では、1863年の若年（2 - 5歳）人口を出生率の分子として使ったが、年上の年齢の人口に比べてやや小さく、宗門改帳の記載漏れのためかと推測した。今回、この年齢別人口を『明治十九年島根県統計書』<sup>註29</sup>掲載の生年別人口と対比し、この問題を検討した。

## 2. 資料および方法

今回、島根大学図書館所蔵の熊谷家文書の宗門改帳原物234冊の各冊末尾にあるまとめ書き（メ書き）を主たる検討対象とした。最初に、その宗門改帳の概況を記述しておこう<sup>註30</sup>。

これらの宗門改帳の作成年次は文久3（1863）年188冊、文久4（1864）年46冊であり、うち文久4年のみのは白杯村（1冊）、湯里村（5冊）で、他はすべて、文久3年のみ（148冊）か、両方の年次（40冊）のものである。これらはすべて69の村町に分かれ、さらに原則として宗門に分かれている（合計延べ241宗門、表1参照）。宗門改帳は1 - 234までの資料番号が付されており、各年次別に村ごとにまとまっているが、同じ村の異なる年次のもはあまり隣接しておらず、村の順序も不規則である。含まれる村町の範囲は表1に示す通りで、石見天領の全域の3分の1の村を含んでいるといえる（廣嶋、2002）。なお、大森町は含まれているが、銀山町は含まれていない。

また、各村のすべての宗門を含んでいるとは限らない。ある村に存在するはずの宗門の宗門改帳がない場合、当然欠落があると見なければならぬ。たとえば、大森町の宗門は4冊あるが、最大と思われる浄土真宗の宗門改帳が含まれておらず、大森町の人口を知ることができない<sup>註31</sup>。ある村に両方の年次の宗門改帳がある場合、片方の年次に欠けた宗門があるなら、その欠落はほぼ明白である。たとえば、温泉津村の浄土真宗は文久4年があるが、3年がない。したがって、表1に示した宗門改帳に含まれる各村人口はその村全部の人口であるかどうかには注意を要する。

表1 村町別宗門数、家数と人口（宗門改帳まとめ書きによる）

番	号	文書地域	村町名	宗門数			家数			人口			人口/家	
				文久3	文久4	計	文久3	文久4	計	文久3	文久4	計		
1	4	2	山中村	1		1		9		43		43	4.8	
2	9	1	川合村一宮領	5		5		49		200		200	4.1	
3	1	1	太田北村	5		5		166		680		680	4.1	
4	217	1	太田村	2	3	5	54	53	107	341	319	660	6.2	
5	201	1	八神村	2	2	4	74	73	147	441	451	892	6.1	
6	194	1	上河戸村	4	4	8	60	59	119	354	341	685	5.8	
7	188	1	下河戸村	2	2	4	80	81	161	409	397	806	5.0	
8	178	1	市村	4	3	7	105	95	200	577	519	1,096	5.5	
9	226	1	長良村	3		3	87		87	567		567	6.5	
10	159	1	渡津村	1	5	6	328	393	721	1,849	2,098	3,947	5.5	
11	203	1	黒松村	2	2	4	206	210	416	1,012	1,033	2,045	4.9	
12	181	1	後地村	4	3	7	280	264	544	1,506	1,443	2,949	5.4	
13	155	1	鍛冶本郷	4	4	8	131	130	261	718	718	1,436	5.5	
14	198	2	上津井村	3		3	98		98	401		401	4.1	
15	152	1	畑田村	3	4	7	89	92	181	405	438	843	4.7	
16	142	3	原村	2		2	74		74	330		330	4.5	
17	140	3	八色石村	2		2	53		53	258		258	4.9	
18	168	3	谷佐郷村入野組	4		4	117		117	596		596	5.1	
19	176	3	谷佐郷村谷組	2		2	83		83	345		345	4.2	
20	172	3	谷佐郷村住郷組	4		4	274		274	1,440		1,440	5.3	
21	53	3	祖式村上ヶ組・瀬戸組	4		4	114		114	461		461	4.0	
22	49	3	祖式村井ノ目組・市組	5		5	105		105	425		425	4.0	
23	135	3	馬野原村	2		2	28		28	121		121	4.3	
24	138	3	湯谷村上組・下組	5		5	131		131	502		502	3.8	
25	114	3	川下村谷戸組	1		1	173		173	679		679	3.9	
26	225	3	川下村嶽山内	1		1	4		4	14		14	3.5	
27	122	3	乙原村	3		3	130		130	589		589	4.5	
28	137	3	高畑村	1		1	39		39	174		174	4.5	
29	127	3	吾郷村	6		6	191		191	723		723	3.8	
30	148	3	奥山村	2		2	72		72	304		304	4.2	
31	113	3	小林村	1		1	35		35	121		121	3.5	
32	32	3	京麓原村	3		3	43		43	191		191	4.4	
33	150	3	大林村	1		1	24		24	100		100	4.2	
34	125	3	瀬村	2		2	48		48	228		228	4.8	
36	147	3	井戸谷村板野木鐘	1		1	23		23	85		85	3.7	
37	133	3	井戸谷村	2		2	56		56	249		249	4.4	
38	115	3	片山村	2		2	26		26	111		111	4.3	
39	151	3	熊見村	1		1	32		32	122		122	3.8	
40	120	3	千原村	2		2	75		75	297		297	4.0	
41	110	3	久保村	2		2	57		57	234		234	4.1	
42	117	3	九日市村	3		3	137		137	592		592	4.3	
43	112	3	村之郷	1		1	70		70	312		312	4.5	
44	10	1	上村	4		4	69		69	306		306	4.4	
45	61	2	新屋村	3		3	176		176	722		722	4.1	
46	77	2	大家本郷	4		4	298		298	1,298		1,298	4.4	
47	58	2	荻原村	3		3	61		61	181		181	3.0	
48	14	1	行恒村	4		4	55		55	180		180	3.3	
49	27	1	松代村	4		4	53		53	189		189	3.6	
50	21	1	大屋村	3		3	68		68	325		325	4.8	
51	18	1	鬼村	3		3	84		84	351		351	4.2	
52	39	1	天河内村	4		4	106		106	569		569	5.4	
53	64	1	大國村尾波組	4		4	61		61	298		298	4.9	
54	65	1	大國村上ヶ組	5		5	126		126	640		640	5.1	
55	63	1	大國村	5		5	215		215	1,110		1,110	5.2	
56	5	2	忍原村	4		4	96		96	356		356	3.7	
57	24	2	戸蔵村	3		3	31		31	117		117	3.8	
58	43	2	福原村	2		2	69		69	303		303	4.4	
59	35	2	三久須村	5		5	66		66	321		321	4.9	
60	106	1	小浜村	4		4	56		56	252		252	4.5	
61	45	2	大森町	4		4	119		119	458		458	3.8	
62	31	2	白林村		1	1		80	80		288	288	3.6	
63	81	1	湯泉津村	4		4	147		147	541	620	1,655	2,275	4.2
90	85	3	畑田村（邑智郡）	1	5	1	46	394	46	260		260	5.7	
91	86	1	吉浦村	2		2	84		84	422		422	5.0	
92	88	1	波積南村	3		3	127		127	640		640	5.0	
93	91	1	福光林村	4		4	41		41	186		186	4.5	
94	95	1	湯里村		5	5		366	366		1,898	1,898	5.2	
95	229	1	浅利村	3		3	279		280	559	1,609	1,586	3,195	5.7
総計				195	46	241	6,563	2,570	9,133	30,819	13,184	44,003	4.8	

合計69村町。ただし、35,36鐘、鍛冶屋は別村に分けられている。ここでは35は36に含めて示す。  
 点線はそれぞれ安濃郡、那賀郡、邑智郡、蓮峰郡、その他（邑智郡、那賀郡の残り）の境を示す。  
 村番号はEAP（ユ・ラニアプロジェクト）で作成されたRYOMA電子ファイルの村番号。90以降は新設。  
 文書番号は島根大学図書館熊谷家文書の番号。各村の最初の文書番号のみ表示。  
 合計234冊、241宗門。2川合村一宮領の1冊は5宗門、59三久須村の1冊は2宗門、3太田北村の1冊は3宗門。  
 26川下村瀬尻の宗門は省略し、1とした。地域番号は1：沿岸、2：中間、3：山間。  
 家数の記載のなかった27乙原村はRYOMAの世帯数を使った。

前稿で用いたEAP（ユーラシア・プロジェクト）で作られたファイル（RYOMAファイル）は、上記2年次のうち文久3年を中心に電子化したもので、文久3年がない村・宗門は文久4年のものを使っている。今回集計した村町名と比較すると、RYOMAファイルは、90 邑智郡畑田村、91 吉浦村、92 波積南村、93福光林村、94 湯里村、95 浅利村の計6村（番号は今回設定）、1,223戸（280戸は同村次年次）、6,601人（1,586人は同村次年次）が欠けており、未入力である。

村の設定について、RYOMAファイルでは、同じ村名に別の組名がつくもののいくつかを一つの村にまとめているが、組ごとに村役人も異なり、本来、別の村とすべきであろう。その例は祖式村瀬戸組と祖式村上ヶ組、祖式村市組と祖式村井の目組、湯谷村上組と湯谷村下組である。なお、宗門改帳147番の井戸谷村栃野木鱧、長藤村源田山鍛次屋はRYOMAファイルでは分けられている（35、36）。したがって、今回数えた村町数はRYOMAの設定に基づくくと69となる。ただし、今回、井戸谷村栃野木鱧、長藤村源田山鍛次屋は、36にまとめておく。

宗門は各人ごとに、さらに家別にまとめて記載されている。各人には家の筆頭に置かれた戸主との関係が記載されている。家ごとにメとして、男女別および男女計の人数が記載されている。また、ほとんどの宗門改帳の末尾に、「右寄」「メ」などと書かれて、まとめ書きとして、これらを合計して「家数」が書かれている。この「家」は、各人を漏れなく把握するために住宅（家屋）を単位として設定されたものと見られる。したがって、空き家は記載されていない。しかし、家数には寺が含まれ、無住の寺も含まれている。

家のメの後、別株としてメが別に書かれている家がある。これは、同一家屋に同居する別世帯と解釈される。この別株の記載された家数はきわめて少数である。なお、別株が村の最後に書かれている村もある。この別株の数は村の家数に比べきわめて少数である。したがって、「家」のほとんどは世帯と同じとしてよく、今回、宗門改帳末尾のまとめ書きに記載された家数を世帯数とみなすことにする。ただし、無住の寺が家数に含まれている場合、これは人の生活

の場としての世帯とはいえないので、気がつく限り除いて修正した家数に改めた。なお、宗門改帳によっては、無住の寺1軒のみが記載されたものもあり、この宗門改帳の世帯数、人口はともに零である。

村ごとの家数、人別（人口）を表1に示す。この結果が、RYOMAファイルによる結果と若干異なるのは、まとめ書きの計数の誤り、家と世帯との相違（別株の同居）、あるいはRYOMAファイルの家または個人の入力欠落によると考えられるが、RYOMAファイルの方がかなり大きい大田北村（196戸、776人；166家、680人）についての原因は不明で、逆に小さい大家本郷は（186戸；298家）、まとめて入力の欠落があるものと思われる。

今回の作業では、村の家数、人口は、宗門改帳の家数、人別を数え上げることはせず、宗門改帳末尾のまとめ書きに書かれている数字をそのままを採用した。ただし、家数が少ない場合、記載のないものもある。宗門改帳の家数が少なく簡単に誤りがわかるもの、数えられるものについては修正、補足した。唯一、家数の大きい村で家数、人別のまとめがない乙原村についてはRYOMAファイルの世帯数、人口を用いた。

宗門改帳末尾のまとめ書きには、村・宗門の家数、人別の集計の次に、「内」として出生と転入（入人）が書かれ、「外」として転出（出人）と死亡（死失、死去）が書かれているものがかなりある。したがって、この「出生」は前年の改め以後の1年間に出生し、現在、記載されているものであり、生存者に限られている。つまり、出生後当年の改めまでに死亡したもの（すべて乳児死亡で、実際に生じた乳児死亡の過半）は含まれていない。実際、個人名が記載されている場合、出生と死亡の両方に同一人が記載されている場合は皆無であった。この関係は、転入についてもまったく同じである。

このような増減要因（動態事象）の件数だけでなく、それを経験した各人について名前など個別の情報の列記が一部の宗門改帳にある。それぞれに多くは戸主の属性（百姓、貸主名+借屋）、戸主名、戸主との続柄が書かれているが、年齢が書かれているものはない。

この動態当事者の列記は、前年の宗門改帳がある場合、その個人情報と結合することにより、個人の属性（年齢、持高など）別の移動率、死亡率を計算することができる。今回はこの作業は行わなかった。なお、出生については、出生月が書かれているものが多いが、それを除くと、個人別宗門記載部分の各人の年齢によって出生者は明白であるから（2歳児には前年1-2月生れも含まれるが）、これによって同様な分析が行なえるので、まとめ書きに特別の価値はない。

この動態事象の記載は、もともと人の動きを追跡するためのものだったと思われるが、記載全体の正確性を高めるに役立っていると考えられる。2年分ある村の宗門改帳の場合、2年分を対比させてみると、出生の記載漏れに伴うと見られる増が見られるものがある。個人の増減要因が明記されている宗門改帳では、このような記載漏れが生じにくいものと考えられる。

村・宗門単位での動態事象（出生、死亡、転入、転出）の件数の記載を用いて村の動態率の計算が行える。すなわち、動態事象の件数を動態率の分子とし、その村・宗門の人口を動態率の分母とする。動態事象が記載されていない場合、それが動態事象がないことを意味しているかどうかを判断しなければならない。というのは、家数が数軒までで少ないとき、まとめ書きがまったくないことがある。これを動態を記載したもの、つまり、出生、死亡、転入、転出がすべて0件であるとみなすことができるとは限らない。同じ村の他の宗門についてそれらが詳しく書かれており、記載者が明らかに同じ人物であると推定される場合、「増減なし」とあれば、各動態事象が0件であるとみなすことができる。ただし、人口がかなり多い（おおむね数十人以上の）村・宗門については動態事象がすべて0件という可能性は低いので、そう解釈せず、動態事象が記載漏れであって、単に人口増加が0であると解釈する。

宗門改帳は各年3月に作成され、上記の動態事象は、文久3年の宗門改帳では文久2年3月から3年2月、文久4年のものは文久3年3月から4年2月において発生したものである。動態事象の発生月の記述から、宗門改帳が各年の3月初め現在で作成されていることがわかる。

動態率は文久2年の場合、文久2年3月から文久3年2月の動態件数を分子とし、文久3年3月初人口から過去1年の人口増加の半分を減じたものを分母とする。分母はこの期間中央の人口になる。文久3年の場合も同様である。文久2、3年をまとめて計算する場合は、文久3、4年3月初人口からそれぞれ人口増加の半分を減じたものを合計して分母とする。この率は、各2年の率を人口で荷重した平均である。

このような作業の結果、熊谷家文書の宗門改帳で動態事象別件数が記載されているのは、村・宗門数241のうち145（60.2%）、人口44,003人のうち30,991人（70.4%）である（表2）。ただし、中間地域では37.2%にとどまっており、山間地域では58.5%で、沿岸地域にもっとも集まっている（79.5%）。なお、動態事象の記載がなく、人口増減のみが分かるものも含めると、村・宗門157（65.1%）、人口34,033人（77.3%）で、上記の範囲とあまり大きく変わらないので、以後の分析は動態事象件数の記載がある村・宗門に限定する。

なお、2つの年次の宗門改帳がある場合、これらを比較する方法により、出現、消滅した個人を把握し、人口変動要因を明らかにできる。出現した個人の年齢によって、出生と転入などによる増加を区別できるが、減少については死亡と転出を区別できない<sup>19)</sup>。また、記載漏れによる増減が含まれる疑いも払拭できない。今回は、死亡と転出を区別したいため、この方法による結果はこの報告では省略する。この方法が可能なのは、表1のようにすべて沿岸地域に区分される12村、8000人余りである。

まとめ書きに、転出とは別に、他村への出稼ぎ者の記載があるのは、井戸谷村、大林村、渡津村、小濱村の4村、欠落ちの記載のあるのは、湯里村、八色石村、後地村の3村、お尋ね中の記載があるのは九日市村1村である。これらは極めて量的に限定されている。実際にそうだったというよりも、記載されていない村が多いと思われる。したがって、出稼ぎなどの実態を対象地域全体で把握するのは難しいと思われる。

表2 村別年別人口動態率：文久2、3（1862、3）年

番号	村	文書	地域	年次	村名	家数計	人別計	人口動態率(%)				
								出生	死亡	転入	転出	増加
3	1	1		文久2	太田北村	166	680	4.1	1.5	2.3	0.6	4.2
4	220	1		文久2	太田村	54	341	2.9	1.7	0.3	2.9	-1.5
4	217	1		文久3	太田村	53	319	1.2	2.4	0.3	7.2	-8.1
5	201	1		文久2	八神村	74	441	4.1	4.5	1.1	1.4	-0.7
5	207	1		文久3	八神村	73	451	3.4	0.7	0.9	1.3	2.2
6	213	1		文久2	上河戸村	56	332	0.6	1.8	0.6	2.4	-3.0
6	194	1		文久3	上河戸村	59	341	1.7	2.6	1.7	4.6	-3.7
7	188	1		文久2	下河戸村	80	409	2.7	2.7	2.2	1.0	1.2
7	223	1		文久3	下河戸村	81	397	2.0	3.0	1.0	3.0	-3.0
8	209	1		文久2	市村	68	346	2.0	4.8	0.6	0.6	-2.8
8	178	1		文久3	市村	95	519	1.9	1.4	1.2	0.8	1.0
10	222	1		文久2	渡津村	328	1,849	2.2	2.0	1.7	1.0	0.9
10	159	1		文久3	渡津村	393	2,098	2.0	1.9	1.0	1.4	-0.3
11	205	1		文久2	黒松村	206	1,012	1.9	2.1	0.3	0.5	-0.4
11	203	1		文久3	黒松村	210	1,033	2.7	0.6	1.1	1.1	2.2
12	181	1		文久2	後地村	280	1,506	1.9	2.0	0.6	1.3	-0.9
12	185	1		文久3	後地村	264	1,443	1.9	1.0	1.4	2.3	0.1
13	155	1		文久2	都治本郷	131	718	3.2	2.7	2.4	2.5	0.4
13	190	1		文久3	都治本郷	130	718	2.1	2.2	1.3	1.3	-0.1
44	10	1		文久2	上村	69	306	3.9	4.2	1.0	0.7	0.0
48	14	1		文久2	行恒村	55	180	1.7	0.6	0.6	1.1	0.6
49	27	1		文久2	松代村	53	189	1.6	3.1	1.0	1.6	-2.1
53	64	1		文久2	大国村尾波組	61	298	2.3	3.0	0.0	1.7	-2.3
54	65	1		文久2	大国村上ヶ組	126	640	2.0	3.3	1.9	0.8	-0.2
55	63	1		文久2	大国村	215	1,110	2.4	1.3	0.9	1.2	0.8
60	106	1		文久2	小濱村	56	252	2.4	1.6	0.4	0.8	0.4
91	87	1		文久2	吉浦村	84	422	2.4	1.9	1.4	2.8	-0.9
93	91	1		文久2	福光林村	41	186	1.6	2.1	1.1	1.6	-1.1
94	95	1		文久3	湯里村	366	1,898	2.5	1.3	0.3	1.1	0.3
95	229	1		文久2	浅利村	279	1,609	1.3	1.2	0.1	0.4	-0.2
95	232	1		文久3	浅利村	267	1,529	2.4	2.4	0.0	1.9	-1.9
14	198	2		文久2	上津井村	98	401	2.5	3.0	1.5	2.0	-1.0
46	79	2		文久2	大家本郷	11	39	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
47	58	2		文久2	荻原村	61	181	1.6	3.8	1.6	0.5	-1.1
58	43	2		文久2	福原村	69	303	2.6	4.3	2.0	0.3	0.0
61	45	2		文久2	大森町	119	458	1.5	1.7	3.3	3.9	-0.9
62	31	2		文久3	白坏村	80	288	2.1	2.8	2.4	3.1	-1.4
17	140	3		文久2	八色石村	53	258	1.5	3.1	0.0	0.8	-2.3
18	168	3		文久2	谷住郷村入野組	117	596	2.3	3.3	1.2	1.0	-0.8
19	176	3		文久2	谷住郷村谷組	83	345	3.8	3.5	0.9	0.9	0.3
20	172	3		文久2	谷住郷村住郷組	274	1,440	2.3	3.4	0.6	0.8	-1.3
21	57	3		文久2	祖式村上ヶ組	61	261	2.2	5.9	2.2	4.8	-6.3
21	53	3		文久2	祖式村瀬戸組	53	200	1.9	9.2	1.4	1.0	-6.8
22	49	3		文久2	祖式村市組	81	321	2.1	6.6	0.9	3.0	-6.6
22	56	3		文久2	祖式村井の目組	24	104	1.9	2.8	0.0	1.9	-2.8
28	137	3		文久2	高畑村	39	174	1.1	6.7	2.2	2.2	-5.6
29	127	3		文久2	吾郷村	191	723	1.6	5.4	1.2	1.1	-3.7
30	148	3		文久2	奥山村	72	304	3.3	3.3	0.3	0.7	-0.3
37	133	3		文久2	井戸谷村	56	249	0.8	3.5	0.4	2.0	-4.3
40	120	3		文久2	千原村	75	297	2.3	6.6	1.7	0.3	-3.0
41	110	3		文久2	久保村	57	234	2.1	4.7	3.9	0.9	0.4
90	85	3		文久2	邑智郡畑田村	46	260	2.3	3.1	0.0	0.0	-0.8

宗門改帳末尾のまとも書きにより動態事象件数が判明した村・宗門のみ集計。

村番号：RYOMAファイル村番号、文書番号：熊谷文書番号（最初の番号のみ示す）。

地域は1：沿岸、2：中間、3：山間。各村の家数計、人別計は、表1と一致するとは限らない。



### 3. 結 果

前稿と同じく、熊谷家文書による石見天領69村を、以下の地理的条件により3つの地域に区分した。

1. 沿岸地域：標高0-100メートル程度で、かつ海岸から8キロ以内程度
2. 中間地域：標高100-300メートル程度で、かつ海岸から8-12キロ程度（主に銀山周辺部にあたる）
3. 山間地域：以上以外

これらの3地域は宗門改帳によって把握した村別に符号によって図1に示されている。各村を地域的に画然と分けるのは難しいところもある<sup>注6)</sup>が、前稿で述べたように、おおむね人口に関して異なる傾向をみることができる。すなわち、沿岸、中間、山間の各地域別に、平均世帯規模は4.91, 3.98, 4.25人、世帯内の平均直系卑属数は2.22, 1.59, 1.81人、合計出生率は2.66, 2.09, 2.23, すなわち、沿岸>山間>中間と計算された。このような傾向から、人口増加率について、この順であるものと予想した。

表3 地域別人口動態：文久2,3 (1862,3) 年

地域	人口増加	自然増加	社会増加	出生	死亡	転入	転出	人口	村・宗門
	率 (%)								
計	-0.66	-0.23	-0.43	2.21	2.45	1.02	1.45	70.5	60.2
1 沿岸地域	-0.20	0.32	-0.52	2.24	1.92	0.93	1.45	79.5	65.5
2 中間地域	-0.83	-0.83	0.00	2.03	2.86	2.21	2.21	37.2	45.5
3 山間地域	-2.47	-2.28	-0.19	2.18	4.45	1.03	1.22	58.5	56.1
	実 数								
計	-205	-72	-133	689	761	317	450	31,008	145
1 沿岸地域	-47	75	-122	528	453	220	342	23,572	93
2 中間地域	-14	-14	0	34	48	37	37	1,670	15
3 山間地域	-144	-133	-11	127	260	60	71	5,766	37

動態率は文久2年3月から文久4年2月の動態件数（実数）を分子とし、文久3、4年3月初人口からそれぞれ過去1年の人口増加の半分を減じた人口の合計を分母とする。  
人口、村・宗門の率は、人口動態が得られた割合。たとえば、計は合計44,003人中の31,008（文久2、3年3月初人口の計）（70.5%）について得られたもの。

高くなったのかもしれない。

一方、粗死亡率は1.92%, 2.86%, 4.45%と地域間で大きな差がある。このため、自然増加率は地域差が大きく、沿岸地域のみで正(0.32%), 中間地域-0.83%, 山間地域と-2.28%となっている。沿岸地域の自然増加率が大きいのは死亡率が低いためである。沿岸に近いほど死亡率が低く、自然増加率が大きいといえる。

人口移動を見ると、どの地域でも転入率、転出率が比較的に類似し、均衡している。沿岸地域と山間地域の転入率、転出率はそれぞれ0.93%, 1.45%, および1.03%, 1.22%で、わずかに転出超過(-0.52%, -0.19%)となっている。これに対して、中間地域は、転入率、転出率のどちらも2倍ほど高く、2.21%, 2.21%で、社会増加は0となっている。銀山に近い中間地域の経済活動の活発さによるのかもしれない。

このように自然増加と逆に、沿岸地域で社会減が一番大きくなっている。つまり、沿岸地域では自然増加率の高さの分だけ社会減が大きいいえ、他地域に人口を放出する機能を持っているといえる。沿岸地域は社会減が大きいいにもかかわらず、人口増加率が大きい(負の値が小さい)のは、やはり死亡率が低いためであるといえる。

以上のように、人口増加率の地域差は結局、自然増加率、つまりは死亡率の地域差に最も決定的に影響を受けているといえる。これが恒常的な状態があるいは一時的なものかを明らかにするのは今後の課題である。

表4 沿岸地域の人口動態：文久2, 3(1862, 3)年

年次	人口増加 率(%)	自然増加	社会増加	出生	死亡	転入	転出	期末人口	村
文久2年	-0.02	0.10	-0.12	2.25	2.15	1.04	1.15		
文久3年	-0.42	0.58	-0.99	2.22	1.64	0.81	1.80		
差	-0.40	0.47	-0.88	-0.03	-0.51	-0.23	0.65		
	実数								
文久2年	-2	13	-15	289	276	133	148	12,826	20
文久3年	-45	62	-107	239	177	87	194	10,746	11

文久2年の動態率は、文久2年3月から文久3年2月の動態件数(実数)を分子とし、文久3年3月初人口から過去1年の人口増加の半分を減じた人口を分母とする。文久3年についても同様。

得られた2年次について、動態率を比較すると、個別の村では表2のように数%ポイントの差もあり、変化は大きいですが、沿岸地域の村を合計すると、表4のように、どの動態率もおおむね類似していて、人口の微減（ $-0.02\%$ 、 $-0.42\%$ ）、自然増加率の正の値、社会増加率の負の値等が共通する。とくに、出生率は両年とも $2.25\%$ 、 $2.22\%$ とよく一致している。これに対して、死亡率は $2.15\%$ から $1.64\%$ まで低下し、変化がより大きいのは予想通りである。また、自然増加率は $0.47\%$ ポイント上昇しているが、社会増加率は $0.88\%$ ポイント低下した。社会増加率の方が自然増加率より変化が大きいのは、一般的にいえるかもしれない。

なお、表2の年次・村別の出生、死亡、転入、転出の各動態率の変動係数（標準偏差/平均）を計算すると、それぞれ $0.37$ 、 $0.60$ 、 $0.77$ 、 $0.83$ となり、この順に変動が大きいことが分かる。

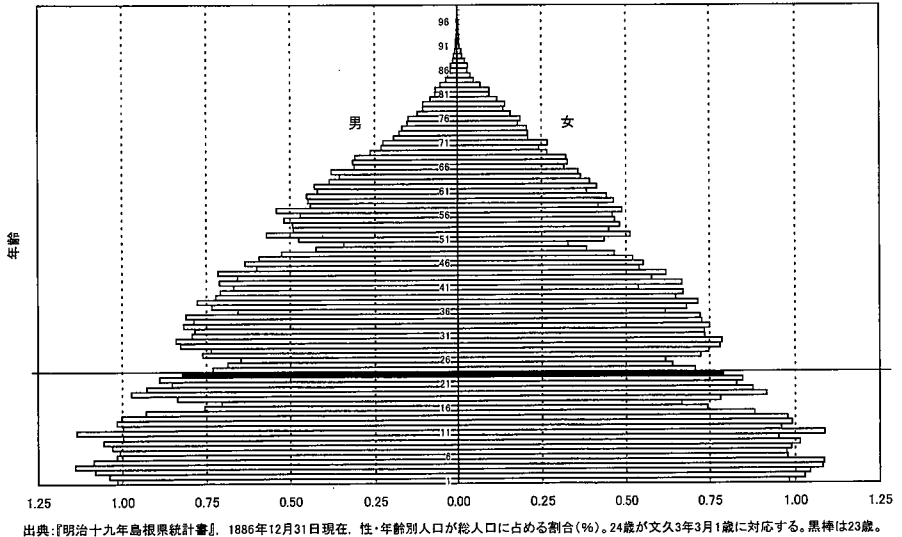
今回得た転入・転出率は年齢別でないため、人口構造にどのような影響を与えるか十分知ることはできない。たとえば、中間地域では、年齢別に $42-51$ 歳以外で夫と同居しない既婚女性が他の地域に比べて多い（前稿、表6）。年齢別の転入、転出によるものかも知れないが、分析することができなかった。

明治19（1886）年12月31日の年齢別島根県人口の統計によって、島根県全体の年齢別の人口の形状を描くと、図3ようになる。一番目立つ人口の窪みは、 $50$ 歳（天保9、1837年生れ）を頂点とした $45-51$ 歳（天保7-13、1836-1842年生れ）および $26$ 歳（文久元、1861年生れ）を中心とした $24-28$ 歳（安政6-文久3、1859-1863年生れ）の2つの部分に見ることができる。すなわち、1837年生れ、 $50$ 歳人口は男女計で1835年生まれ $52$ 歳人口の（ $2357+2248:3929+3532$ ） $61.7\%$ で、 $38.3\%$ も小さい。また、同様に1861年生まれ、 $26$ 歳人口は1857年生まれ、 $30$ 歳人口の $77.8\%$ で、 $22.2\%$ 少ない。ほかに単発的に人口の窪みは存在する。

この大きな窪みのうち前者は、天保の飢饉に対応する時期に生まれた人口であり、人口の上にはっきりとその影響を見ることができる。また、後者はこの

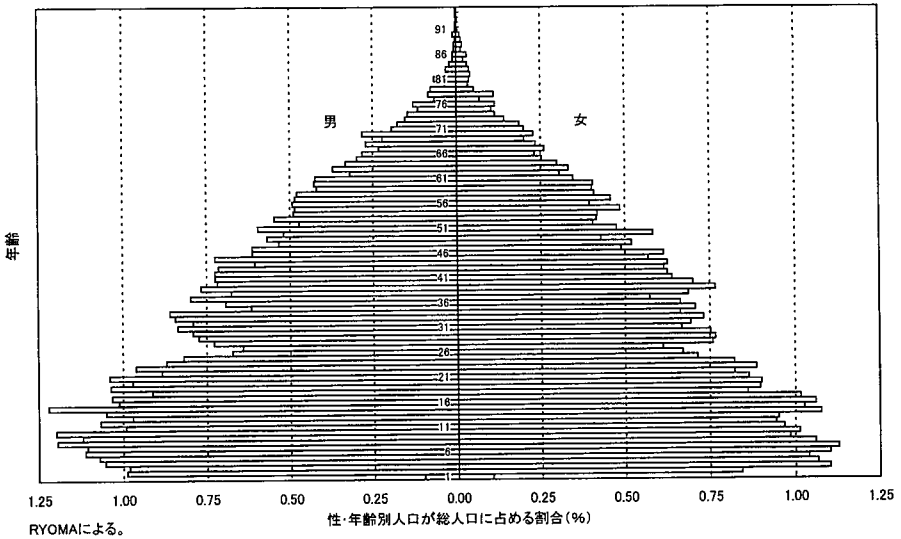
子世代に当たる人口であると見られる。つまり、親世代人口の減少が1世代後に子世代に及んだものと考えられる。ただし、幕末の社会の激動によるものとも考えられる。

図3 性・年齢別人口割合：島根県，明治19(1886)年



本研究で対象とする石見天領の文久3，1863年3月における人口（図4）においても、確かに、天保7-13，1836-1842年生れに対応する22-28歳における人口の窪みが見られ、またこの子世代に当たる1-5歳人口（安政6-文久3，1859-1863年生まれ）も少ない。これは、上記のような明治19年島根県年齢別人口に共通する現象であるといえる。ただし、女性人口については男性人口に比べこれらの傾向はやや弱い。これがどういう理由によるかはわからない。少なくとも、出生数が現実減少したために1-5歳人口が少ないものといえ、宗門改帳の記載漏れなどによるものではないことが確認できる。

図4 性、年齢別人口割合：石見銀山領（宗門改帳），1863年3月



### 謝辞

熊谷家文書の利用については島根大学図書館に、宗門改帳の解説には森本一彦氏に、RYOMAファイルの使用については、速水融氏、落合恵美子氏、平井晶子氏に、大変お世話になった。記して、謝意を表したい。

## 注

- 1) 楠本(2003)は大森町の金融資本(石見銀)の活動を記述している。
- 2) 明治以後、初めての年齢各歳(出生年各年)別の人口が、『日本帝国民籍戸口表』に基づき、掲載されている。
- 3) その一覧は、島根大学附属図書館1981にある。
- 4) 大森町の人口は嘉永3(1850)年の宗門改帳により1,130人であったという(山岡, 1966)。宗門別の人口内訳は示されていないが、家数は浄土真宗189軒に対し他の宗門は112軒で、他の宗門の家数は文久3年の119軒に近く、したがって、町の全人口も嘉永3年と同じ程度と見ていいだろう。なお、大森町の浄土真宗の家数と他の宗門の家数の比率は約2:1で、したがって、人口の比率もほぼ同じと考えられ、この比率は他の村のそれ(6.1:1)に比べて著しく異なっている。
- 5) 転出と死亡を個別に識別することは難しいが、それぞれの件数を明らかにするために、死亡と転出の世帯内での同時発生の程度の違いを利用する方法が考えられる。たとえば、死亡の発生は世帯内で単独であることが複数同時発生よりはるかに多いのに対して、転出は複数同時発生がかなり多いと考えられるからである。このような単独発生と複数同時発生の比率は、転出と転入で同じと仮定することも許されるかもしれない。出生の把握が比較的容易であるため、転入におけるこれらの比率の観察も容易である。死亡における単独/複数比率には、今回の宗門改帳末尾の増減当事者列記を用いるなど特別の観察が必要である。
- 6) たとえば、100メートルを少し超える標高に位置する波積南村(127家)は沿岸地域に入れたが、1885(明治18)130世帯、1937年83世帯、2001年32世帯と急速に過疎化し、波積本郷の各同年、102, 112, 100世帯とは対照的な変化を示している(喜多村, 2003)。
- 7) GISはmandaraなどを使用した。
- 8) 動態事象に記載がなく、人口増減のみが分かるものを含む人口増加率は全域、沿岸、中間、山間それぞれ-0.74%, -0.31%, -1.05%, -2.44%で、動態事象の記述があるものと大差がない。

## 文献

- 喜多村 正 2003 「波積の村落と社会生活」『社会システム論集』8, 島根大学法文学部, 65-94.
- 楠本美智子 2003 「近世地方金融資本「石州銀」と九州」徳永光俊, 本田三郎編『経済史再考: 日本経済史研究所開所70周年記念論文集』, 思文閣出版, 167-185.
- 島根大学附属図書館 1981 『石見国銀山領地方文書目録 熊谷家・坂根家・林家』
- 廣嶋 清志 2002 「幕末石見天領の人口機構—単年次宗門改帳による観察」『経済科学論集』28, 1-28.
- 山岡 栄市 1966 「家族の縮小化とその社会経済的背景—大田市大森町の場合—」『山陰文化研究紀要』第7号, 1-29.